

「居心地の佳いすまい」を設計し、
持続可能な家づくりを考え、実践する。

菅家太建築設計事務所
<https://kanketadashi.com>
東京∞北海道

北海道の「住」をゆたかにするポータルサイト『ひとまわり』
<https://hitomawari.net>

この冊子は、これまでの家づくりをとおして感じた疑問や問題を見つめ直し、
これからの家づくりをどのように考えていったらよいかをテーマに、
菅家太建築設計事務所が不定期に刊行する冊子です。

これからのすまい
vol.9

2022年6月発行

© 2022 TADASHI KANKE

写真：菅家太建築設計事務所（別途記載のあるものを除く）

表紙：土場に積まれたチップ用の原木と向かい合って建つ木下林業新社屋。
外壁に使われたミズナラも、もとはこのような原木の中にあった。
（設計：菅家太建築設計事務所 / 施工：木村建設）
（北海道十勝郡浦幌町）

これからのすまい

菅家太
建築設計
事務所

■「すまいを支える言葉」 第6回

下：チップ工場の前で皮むきの工程を待つ原木。右：搬出作業の進むチップヤード。新社屋の断熱材にはカラマツのチップを加工したウッドファイバーが使われた。

山からチップ工場に運ばれてくる原木の中には、銘木市へ送るほどではないがそのままチップにするには惜しい広葉樹も含まれている。そうした原木までもチップにしてしまうことへの違和感から、木下さんはかつて自社で行っていた広葉樹の製材に再び取り組み始めている。



「これを
毎日見ていると、
感覚がおかしくなる」

木下 真利
(きのした まさとし)

木下林業
北海道十勝郡浦幌町



木と人の物語

木下林業新社屋におけるあらたな試み

「樹齢50年の木は50年使う。樹齢100年の木は100年使う。」これは、木のサイクルに従って木を使い続けようとする人のあり方を、シンプルに言い表した言葉だと思います。

50年かけて育つ木を、10年で育てることはできません。だから、木を使い続けたいと思ったら、人が木の速度に合わせる必要があります。そうしな

ければ森は荒れ、山ははげ山になり、生活を支える資源としての木は枯渇してしまいます。

しかし、こんなあたりまえのことでも、山から離れたところで生活している私たちは実感することが難しくなっています。だからこそ、山を知る人たちが語る木の言葉に耳を傾け、自分事として考える機会としたい。そう思います。



製材所の日常風景。事務室前に積まれたチップ用の原木。



製材作業中の木下真利さん。（写真：日比野寛太）



「こんな立派な木をチップにするなんて！」木下林業新社屋のミズナラの外壁やフローリングは、そんな木を惜しむ気持ちに応えるひとつの選択肢になるはず。これらはチップ用材として山から出てきた原木からつくられました。製紙やバイオマスの原料として利用されるチップは比較的短命ですが、より長寿命な使い方ができるなら、それは人が木の速度に近づこうとする試みです。

チップ用の原木なので、品質にバラツキがあったとしても使い方次第でなんとかする。施工の大変さも受け入れなくてはならない。加工する製材所の苦労もひとしおですが、大工の張り手間も相当なもの。広葉樹のミズナラを外壁に使うなんて、硬いし重いし短い

し、作業は大変。新社屋の外壁は大工が極寒のなか、すべて下穴をあけてからデッキビスを揉み、針葉樹であれば釘留めで済むところの何倍もの手間をかけて張っています。

まもなく創業 100 年を迎える木下林業。近年は針葉樹の製材が主で、新社屋の建設においても、社有林から伐り出したカラマツで柱や梁をつくっています。しかし、かつてはナラやタモなどの広葉樹の製材を盛んに営んでいたそうです。そんな製材所の歴史を投影しながらミズナラの外壁を眺めていると、まるで製材所のこれまでとこれからが、この社屋に凝縮されたかのように思えてきます。ここから 100 年、あらたな木と人の物語。



左：目板張りで張られたミズナラの外壁。上：外壁と同様、チップ用材として山から出てきた原木からつくられたミズナラのフローリング。（写真：日比野寛太）



目板で押さえる前の羽目板を施工中の外壁。(写真：木村祥悟)



上：外壁のサンプルを前に話をする木下真利さんと新社屋を施工した木村建設の木村祥悟さん。
下：“救出”されたミズナラの原木たち。次の見開き：西日に染まる木下林業新社屋。(写真：日比野寛太)

